



Title	安史の乱後の唐朝と仏教
Author(s)	中田, 美絵
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47086
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	中 田 美 絵
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 0 7 8 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	安史の乱後の唐朝と仏教
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 荒川 正晴 (副査) 教 授 森安 孝夫 教 授 桃木 至朗

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、唐代後半期における宦官（禁軍）・密教僧侶・ソグド人の密接な提携関係を明らかにし、そこから律令制崩壊後における皇帝を施主とする仏教事業隆盛の現象を解明しようとしたものである。

第Ⅰ部第1・2章では、代宗期に举行された護国經典『仁王経』の再訳とそれを講読する法会が、その前後の時期に及んで取り上げられる。この仏教事業は、安史の乱後に举行された長安における最大規模の事業であり、これを举行する意味については、僕固懷恩の反乱など唐朝の「国難」対処と結び付けて考えるのが常であった。これに対して申請者は、これが安史の乱後台頭著しい宦官と密教僧の不空との協力のもとに実施されていること、またその時期が内廷から外廷に宦官が勢力を伸張していく時期に当たることを明らかにし、これらの文脈のなかで『仁王経』翻訳と法会のもつ意味を捉えなおす必要があると指摘する。すなわち、宦官はこの法会を利用して外廷の官僚勢力に対して、自らの権力の正当性をアピールしたのであり、そこにこそこの仏教事業の意味があった。そして、これ以降も宦官は仏教勢力との連携を保ち続けるとともに政治への介入を強めていったことから、『仁王経』翻訳事業と法会は、宦官が内廷から外廷に参入する契機を与えた出来事として位置づけることができる、と主張する。

第Ⅱ部第1・2章では、宦官と提携した不空の仏教活動を支えた人物を抽出し、それらがどのようにして不空のもとに集ったのか、また不空の長安仏教界における台頭とそれらがいかなる関係にあったのかを考察している。安史の乱後、宦官は彼らの軍事力拡大の過程において、ソグド人を中心とする武人を自らが率いる軍に組み込んでいった。このなかには不空が授けた灌頂で結びついた河西出身のソグド人をはじめとする武将もふくまれており、彼らが宦官勢力と一体となって不空を支持し、不空の台頭を促した。さらに、ソグド人のなかには、僧侶として不空の門下に組み込まれたものもいた。このように、不空の周囲には僧侶以外にも宦官・禁軍の武将、そしてそれぞれの傘下に入り込んだソグド人をはじめとする非漢人勢力が集結しており、この集団が不空の仏教活動を支えていたのである。そしてこうした集団による不空一門に対する支援体制は、不空の死後も消滅することなく存続していたと結論する。

第Ⅲ部第1～3章では、宦官・禁軍勢力と不空仏教勢力とが行った仏教活動のうち、五臺山文殊信仰と王権との関係に着目した。代宗期に、五臺山文殊菩薩は不空によって王権にとって必要不可欠な存在として位置づけられる。代宗は普賢行を实践する普賢菩薩もしくは金輪聖王と位置づけられ、自らの王権のために、また「民衆」のために五臺山文殊を拝む必要があった。さらに、それに文殊菩薩が「応」ずることによって「民衆」を救い、国土を安らかにするという形式が完成した。そして、皇帝と文殊信仰との関係は、次の徳宗の時期にも受け継がれ、五臺山の文殊菩薩

は「大唐」を守護するという概念が定着することになったという。このような王権と五臺山文殊菩薩との関係が、東アジア仏教圏に広まり、その後の各地域への五臺山信仰の伝播に大きな影響を与えたとみられる。また、徳宗期になると五臺山文殊信仰の隆盛に伴い、『四十華嚴』が翻訳される。『四十華嚴』の主旨は、文殊菩薩と不離の関係にある「普賢行」にあり、これは代宗以来皇帝が実践していた仏教に基づく統治のあり方であることから、『四十華嚴』は徳宗の王権を支えるのに十分な思想を兼ね備えていた。そして、このことを天下に知らしめるために、『四十華嚴』を全国の寺院に頒布していったのであり、翻訳事業とともにこれを推進したのが、第Ⅰ・Ⅱ部で述べてきた宦官・禁軍勢力と仏教勢力であったと指摘する。

論文審査の結果の要旨

周知のように、唐朝を支えてきた律令体制は、安史の乱後の8世紀後半にはほぼ破綻するが、その後1世紀以上にわたり唐朝は王朝としての命脈を保った。またこの律令制崩壊後の時代には、律令体制の外にいた宦官や節度使が中央・地方の政治を主導するとともに、宗教面では新たに密教が台頭し、軍事・経済面でもソグド人がなお活躍していたことが既に指摘されている。本論文は、王権と仏教という視点から、8世紀後半以降に見られるこうした諸事象を結びつけ、一つのまとまった像を提示しようとする意欲作である。すなわち律令制の崩壊後、唐朝の皇帝は、仏教の理想的君主である転輪聖王としての顔をもつようになることを明らかにし、これが禁軍を掌握する宦官と密教僧およびソグド人らの密接な連携のもとに段階を踏んで準備されたものであった、と刮目すべき指摘をする。この指摘は、律令制崩壊の後、宦官や節度使が台頭するなか、唐朝は自らの権威をどのように維持したのか、という唐代政治史上の大問題に正面から答えるものとなっている。

本論文の多岐にわたる考察のなかでも白眉と評することができるのは、五台山の金閣寺に配置された尊像の意味を読み解き、唐の皇帝と文殊菩薩を繋ぐ論理を明確にした点であろう。中国に仏教が伝来して以降、仏教は王朝国家と様々に交渉をもってきたが、この8世紀後半の動きは、両者の長きにわたる交渉の一つの到着点でもあり、そこで構築された皇帝と文殊菩薩を繋ぐ論理は、皇帝を文殊菩薩の化身と位置づける清代にも根底において継承されてゆく。また本論文で明らかにした五台山文殊信仰が、ユーラシア東部域（日本を含む）の仏教圏に広く伝播していったことを考えれば、本論文は唐代政治史や中国仏教史の枠にとどまらず、さらに広い分野の研究に裨益するものとなろう。

このように本論文は、大きなスケールをもつ博士論文として高く評価すべきであるが、なお今後、検討を要する課題も少なくない。まず何よりも文章表現が稚拙な部分が認められるので、そのスキルアップが求められる。内容面についても、本論文において重要なキーワードとなる転輪聖王思想や、さらには唐代政治制度に対する理解がなお十分ではない。議論の重要な部分にも関わることであり、早急なる改善が求められよう。また検討の拠り所とした經典翻訳事業に対する考察が、いささか表層的な分析にとどまっている。とりわけ翻訳の対象となった經典そのものに対する分析が等閑になっている。翻訳事業に対する考察を深めるためには、その經典が担ってきた歴史的な背景を十分に踏まえる必要がある。

しかし、これらの瑕疵や課題は、本論文が達成した成果と意義を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと認定する。